

委託事業実施内容報告書
平成30年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業
【地域日本語教育実践プログラム(B)】

実施内容報告書

団体名： 特定非営利活動法人かながわ難民定住援助協会

1. 事業の概要

事業名称	地域に定住する外国人の高齢者と共に学び合う日本語教室
事業の目的	地域で高齢期を迎えている外国人定住者の安心・安全な老後を過ごせる地域社会づくりを共に考え、行動する。
日本語教育活動に関する地域の実情・課題	地域には30年以上前から外国人の集住地区がある、ニューカマーと呼ばれているベトナム、ラオス、カンボジアからのインドシナ難民定住者やブラジル、ペルー、アルゼンチンからの南米の方たち、中国からの帰国者とその家族など(以下:外国人高齢者)が高齢期を迎えている。その現状は高齢であることから仕事には就けず、核家族化で子どもとの同居も叶わず、日本語の不自由さから周囲の人とのコミュニケーションがとれにくく、老夫婦で家にこもってしまうケースも増えている。外国人高齢者も又、日本語支援が必須であると共に、生き甲斐を持って、地域で孤立することなく、社会生活を送ってほしいと願っている。定住者が地域社会に円滑に参加できるようにするには地域社会に適応するための高齢期を視野に入れた生活情報の周知徹底が欠かせない。しかしながら、外国人高齢者の高齢期支援体制の環境整備は図られているとは言いがたい。中でも、介護保険や年金など社会保障制度が万全ではなく、又、その理解も進んでいないので、日本人とは歴然とした差があることは否めない。そこには言葉の不自由さや文化、習慣の違いのみならず、保障制度もないという負の連鎖となっている。外国人高齢者ばかりではなく、誰もが避けて通れない高齢期を豊かで実り多い時期とする為に当事者のみならず、家族支援者、行政、関係機関などが、協力して課題に向き合い、克服するための具体策を図り、外国人高齢者の高齢期への理解と支援の輪を広げて、多文化共生社会を構築しなければならいと考えて、下記の取組事業1～4を実施した。
本事業の対象とする空白地域の状況	
事業内容の概要	上記の実情と課題を踏まえて下記の取り組みを計画した。高齢期の外国人定住者(以下:外国人高齢者)の実態に関する調査を実施した。外国人高齢者の生活の質の改善に役立つ日本語教育プログラムを筆頭に講習会の企画、運営を行う上でベースとなる情報をインドシナ難民定住者を中心とした60歳以上の高齢定住者に対する調査を通して明らかにした。高齢定住者の生活の質の向上に向けた日本語教室やイベントなどの企画、実施を行うため、まずは地域での外国人高齢者の実態を明らかにする調査を行った。次に、日本で高齢期を過ごすための井戸端的な日本語教室を実施した。外国人高齢者の交流や居場所づくり、行政サービス他の情報を日本語で的確に把握して利用するための行動を起こせるようにした。高齢期に対応できる知識、健康、体験を身に付けるための日本語の学び合いをし、併せて日本語教材の作成もした。井戸端会議的に小グループで学び合い、参加者がより自分のことを話しやすい場となるように配慮した日本語教室づくりを目指し、外国人高齢者の参加を促した。テーマは老後のあれこれ、介護保険について、病気の予防と老化の予防、生活保護について、3箇所で開催した。各回のテーマの生活情報資料(チラシや冊子など)の内容を事前に検討して分析し、教材としてやさしい日本語授業を行った。参加者が生活の中で「こんな時、あんな時」に何を考えるかを夫々の老後に結び付けて、考えて行動できるようにした。又、地域で高齢期の外国人定住者の体験、蓄積型、日本語教室を実施した。外国人高齢者が地域の通所介護施設を訪問したり、市や区の施設での体操教室などを通して、夫々の機関で提供されるサービスを理解すると共に市や区にも外国人高齢者の存在を認識し、理解してもらおう機会とした。外国人高齢者が地域社会の活動に参加して、老後の行動半径を広げるきっかけとしたり、ボディアクションで日本語を習得しながら楽しめることを体験したりして、周囲にも外国人高齢者の存在を認知してもらった。最後に、事業の総まとめとしてシンポジウムを開催して、地方公共団体前職員、研究者、ジャーナリスト、コミュニティリーダー、介護の専門職などとの連携協力を得られたことは大きな成果であった。ただ、時間的に制約があったことが残念であり課題となった。どの事業も対象者である、高齢外国人の方々が積極的に講座や事業に取組み、自身の高齢期の過ごし方に強い関心をもって向き合っていることが分かったのは大きな成果であった。しかしながら、予測しがたい、老後の資金や健康面などで不安を残し、子ども家族との関係性についても問題がないわけではないように見受けられたことが今後の課題となると考える。
事業の実施期間	平成30年6月～平成31年3月(10か月間)

2. 事業の実施体制

(1) 運営委員会

【運営委員】

1	坪谷 美欧子	横浜市立大学・准教授
2	小野塚 美宝	介護施設・主任相談員
3	船越 英一	大和市役所・再任用職員
4	新岡 史浩	在日ラオス人協会・事務局長
5	酒井達男	日本語学校 飛鳥学院 学院長
6	櫻井 弘子	かながわ難民定住援助協会・会長
7	松本 典子	かながわ難民定住援助協会・理事

【概要】

回数	開講日時	時間数	場所	出席者	議題及び検討内容
1	平成30年10月27日 (土) 18:00～20:00	2時間	かながわ難民定住援助協会 事務所	坪谷美欧子、小野塚美宝、船越英一、酒井達男、新岡史浩、櫻井弘子、松本典子	1. 事業概要と取組事業1～4の事業実施の開始状況や体制整備の報告 2. 業務計画書・業務経費の報告と検討
2	平成30年11月24日 (土) 18:00～20:00	2時間	かながわ難民定住援助協会 事務所	坪谷美欧子、小野塚美宝、船越英一、酒井達男、新岡史浩、櫻井弘子、松本典子	1. 取組事業1. アンケート調査の報告: アンケートの回答の記述とヒアリング調査を添付して実施した。 2. 取組事業2. 「井戸端日本語教室」2回、3回の実施報告。 3. 検討内容: アンケートの内容、実施方法、回収率、分析結果などを検討。「井戸端日本語教室」2回、3回の実施について内容、出席率などについて検討した。
3	平成31年1月26日 (土) 18:00～20:00	2時間	かながわ難民定住援助協会 事務所	坪谷美欧子、小野塚美宝、船越英一、酒井達男、新岡史浩、櫻井弘子、松本典子	1. 取組事業2の報告: 「井戸端日本語教室」4回、5回の実施と移動「井戸端日本語教室総集編」2回の実施報告をした。 2. 取組事業3. の報告「体験型模擬日本語教室」で「施設巡り」の実施報告をした。学習者より取組事業2. の継続をのぞむ発言があった。 3. 検討内容: 取組事業2. の実施結果についてと移動教室の意義、実施方法などについて検討した。
4	平成31年2月24日(土) 18:00～20:00	2時間	かながわ難民定住援助協会 事務所	坪谷美欧子、小野塚美宝、船越英一、酒井達男、新岡史浩、櫻井弘子、松本典子	1. 取組事業4. 「シンポジウム」の実施報告。 2. 検討内容: 取組事業1～4の事業の振り返りをし、成果と課題を検証した。委員より、外国人高齢者問題についての対策は必要にもかかわらず、現状ではなされていないので、貴重な取り組みであるとの発言があった。

(2) 地域における関係機関・団体等との連携・協力

連携体制	大和市国際・男女共同参画課、横浜市東区、通所介護施設とは見学と施設の紹介の協力要請、専門家(大学)とアンケートの編集とシンポジウムのまとめ、大和市国際化協会とは本事業の協力者や外国人への参加促進の周知などの協力体制を図り、事業を実施した。企業、NPO法人、自治会、ボランティア団体などには各事業への参加や周知を依頼して、連携協力体制を敷き、地域の日本語教育の必要性を広く地域住民の方々に呼び掛けた。
------	---

(3) 中核メンバー及び関係機関・団体による本事業の実施体制

本事業の実施体制	取組1に関してはアンケート等を大学の専門家と作成した。コミュニティの代表とともに調査計画を作り実施。調査の分析では、社会学・日本語の専門家、福祉・介護の行政担当者が入って教材の作成につなげた。取組2・3では作成されたをもとに日本語講師・日本語ボランティアが授業をシュミレート後井戸端日本語教室を開催した。また通所介護施設の職員からは高齢者の介護の実感を日本語ボランティアが学び、ともに高齢定住者の受け入れについて考え、取組3の実施につなげた。取組4のシンポジウムではこの事業の成果と課題を踏まえて、当事者や介護事業の専門家、新聞記者、自治体関係者、研究者、一般市民、NPO法人関係者が一堂に会し議論した。取組1～4までを実施する過程で多くの分野の方々との連携・協力を得られたことから相互に理解が深まり、同じ目標に向かってネットワークの輪が広がることができた。
----------	---

3. 各取組の報告

＜取組1＞											
取組の名称		取組1:高齢期の外国人定住者(高齢定住者)の実態に関する調査									
取組の目標		高齢定住者の生活の質改善に貢献する日本語教育プログラムや講習会の企画、運営を行う基礎となる情報をインドシナ難民を中心とした60歳以上の外国人高齢者に対する調査を通して明らかにする。									
取組の内容		高齢化問題が深刻化する中、高齢者向けサービスは日本人を想定して設計されており、高齢者関係の日本語教育はもっぱら労働力としての、外国人介護士育成のために実施されている。日本語が不自由で、社会から孤立しがちな外国人高齢者の問題は深刻であるにもかかわらず、その実態に対する日本社会の理解は乏しく、対応が遅れている。そこで、外国人高齢者の生活の質向上に向けた日本語教室やイベント等の企画、実施を行うため、まず地域で高齢期を迎えた外国人定住者の実態を明らかにする調査を行った。 一般的に外国人定住者を対象とした調査は言語や習慣の問題から回答者の協力を得ることが難しいが、高齢者問題という極めてプライベートな事柄に関する調査では尚更協力を得ることが困難であることが想定された。かながわ難民定住援助協会は30年以上に渡ってインドシナ難民定住者に対するアフターケアや、地域の外国人定住者に向けた日本語教室の運営を行ったことにより、外国人定住者との間で培ってきた信頼関係をベースに調査を設計し、外国人定住者の協力も得て調査票の翻訳や配布、ヒアリングを円滑に行うことができた。 具体的には、地域の主にインドシナ難民高齢者およびその関係者に対してアンケートとヒアリング調査を行った。かながわ難民定住援助協会の主な支援対象者であるインドシナ三国のコミュニティーリーダーの人脈や、神奈川県各地で開催している日本語教室の場を積極的に活用し、相当数の回答者を集めた。質問は外国人高齢者の生活実態や介護サービス等の利用実態、抱えている問題の3つに焦点をあて、アンケートを通して量的な調査を行い、ヒアリング調査を通してアンケートなどでは明らかにできない、より詳細かつ複雑な実態を明らかにした。									
☐	空白地域を含む場合、空白地域での活動										
取組による体制整備		地域の高齢定住者およびその関係者に対する調査結果は報告書としてまとめ、高齢定住者およびその関係者向けの日本語教室やイベントを企画、運営する基礎資料にするとともに、外国人高齢者に対するサービス向上のために活用した。かながわ難民定住援助協会がこれまで培ってきた、地域に密着した日本語教室の企画と運営の経験を活かしつつ、高齢定住者の実態に沿った、外国人高齢者およびその関係者が生活の質向上に役立てられる日本語学習プログラムを構築した。									
取組による日本語能力の向上		-									
参加対象者		インドシナ難民定住者を中心に地域に定住する外国人高齢者					参加者数 (内 外国人数)		80人 (80人)		
広報及び募集方法		インドシナ難民コミュニティやかながわ難民定住援助協会の日本語教室などを通してアンケートやヒアリングの回答者を募り、配布									
開催時間数		総時間53時間(空白地域0時間)					内訳 1時間×1回、2時間×11回、4時間×4回、6時間×1回、8時間1回				
主な連携・協働先		カンボジア、ベトナム、ラオスそれぞれの当事者コミュニティ									
受講者の出身 (ルーツ)・国別内 訳(人)	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネシア	ペルー	フィリピン	日本	
				18							
※該当する場合のみ		カンボジア(4人)、ラオス(23人)									

実施内容								
回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	研修のテーマ	授業概要	講師・指導者名	補助者・発表者・会議出席者等名
1	平成30年6月21日(木)	10:00 - 12:00	2	かながわ難民定住援助協会事務所		アンケート案の資料作成調査	国枝智樹	
2	平成30年6月25日(月)	13:00 - 15:00	2	かながわ難民定住援助協会事務所		アンケート案の資料作成調査		平川雄二、小池宏子、蛭川栄二
3	平成30年6月28日(木)	13:00 - 15:00	2	かながわ難民定住援助協会事務所		アンケート案の資料作成調査		平川雄二、小池宏子
4	平成30年6月29日(金)	15:00 - 17:00	2	かながわ難民定住援助協会事務所		アンケート案の資料作成調査		平川雄二、小池宏子
5	平成30年7月4日(水)	13:00 - 15:00	2	かながわ難民定住援助協会事務所		アンケート案の資料作成調査	国枝智樹	平川雄二、蛭川栄二
6	平成30年7月9日(月)	10:00 - 11:00	1	かながわ難民定住援助協会事務所		アンケート案の資料作成調査		平川雄二、蛭川栄二
7	平成30年7月25日(水)	15:00 - 17:00	2	かながわ難民定住援助協会事務所		アンケート調査案のチェック		平川雄二
8	平成30年7月27日(金)	10:00 - 12:00	2	かながわ難民定住援助協会事務所		アンケート調査案のチェック	国枝智樹	
9	平成30年8月19日(日)	13:00 - 17:00	4	藤沢市善行公民館		ベトナム人への調査	国枝智樹	日野肇、蛭川栄二
10	平成30年8月26日(日)	13:00 - 17:00	4	いちようコミュニティハウス		ベトナム・カンボジア人への調査		日野肇、小池宏子、伊藤クリスナー
11	平成30年9月3日(月)	10:00 - 12:00	2	かながわ難民定住援助協会事務所		カンボジア人へのヒアリング		小池宏子、伊藤クリスナー
12	平成30年9月7日(金)	10:00 - 12:00	2	かながわ難民定住援助協会事務所		カンボジア人へのヒアリング		蛭川栄二、伊藤クリスナー
13	平成30年9月4日(火)	13:00 - 17:00	4	かながわ難民定住援助協会事務所		ベトナム人へのヒアリング		平川雄二 和田えみ(ヒアリング通訳)
14	平成30年9月10日(月)	13:00 - 15:00	2	かながわ難民定住援助協会事務所		ベトナム人へのヒアリング		日野肇、蛭川栄二
15	平成30年9月12日(水)	13:00 - 17:00	4	いちようコミュニティハウス		ベトナム人へのヒアリング		日野肇、小池宏子
16	平成30年9月14日(金)	13:00 - 15:00	2	藤沢市善行公民館		ベトナム人へのヒアリング		日野肇、小池宏子
17	平成30年9月16日(日)	10:00 - 17:00	6	ラオス文化センター		ラオス人へのヒアリング		蛭川栄二、新潟史浩
18	平成30年9月30日(日)	13:00 - 16:00 13:00 - 18:00	8	ラオス文化センター		ラオス人へのアンケート調査の実施		小池宏子(3時間)平川雄二(5時間)新潟史浩(アンケート調査通訳)

(1) 特徴的な活動風景(2～3回分)

○取組事例①

【第9回 平成30年8月19日】

藤沢市善行公民館でベトナム人定住者に対するヒアリングおよびアンケート調査を行った。同公民館で13時から17時の間、日本人スタッフとベトナム人コミュニティのリーダーでありベトナム語通訳でもある方と、一緒に訪れたベトナム人高齢者やその家族から生活の実態や介護、老後の不安について話を伺った。

13時から、集まった方々にアンケートに記入してもらい、ヒアリングを行った。ヒアリングは単独で回答してもらった内容もあったが、次第に意見を述べるひとが増え、全体で話し合う状態に発展する場面もあった。ヒアリングを通してアンケートでは質問していなかった項目、特に老後の具体的な、金銭的な不安や介護制度に対するさまざまな疑問、高齢者に対する日本語の勉強会をする上で、移動手段が大きな課題になることについて話を伺うことができた。ベトナム語通訳の方も参加したことによって、言葉の問題等なくアンケートとヒアリングを実現することができた。



○取組事例②

【第17回 平成30年9月30日】

ラオス文化センターにてラオス人へのヒアリングおよびアンケート調査を行った。ラオス人コミュニティのリーダーであり、通訳としても活躍している方にアンケートの内容説明、ヒアリングのサポートをしていただき、ラオス人高齢者やその家族から生活の実態や介護、老後の不安について話を伺った。

多くの方にアンケート用紙に記入していただき、さまざまな不安や悩みについて伺うことができた。日本語では説明が難しい話についても、通訳の方のサポートにより聞き取りをすることができた。ラオス人高齢者も利用している当事者団体の施設、ラオス文化センターの協力を得られたこと、また、参加者の熱心な取り組みにより、多くの方からアンケートを回収することができ、有効なヒアリングを多数行うことができた。



(2) 目標の達成状況・成果

郵送を含めて80人にアンケートを渡し、45人からアンケートの回答を得ることができた。また、20人近い方からヒアリングを行うことができた。アンケートとヒアリングの結果は整理し、取組2から4の企画と実施に役立てることができた。外国人高齢者が集まる場合は少なく、アンケートを郵送しても回答を得ることが難しいことが予想された中、各コミュニティのリーダーのサポートを得て人を集め、会場も借りてアンケートやヒアリングを実施できたことにより、多くの方から貴重な情報を得ることができ、インドシナ難民定住者の高齢者を中心とした生活の実態や悩み、老後に対する考え方などを相当程度把握することができた。また、取組2、3を実施するにあたっての開催場所や実施内容、進め方についても貴重な意見を多数得ることができ、その後の事業を進める上で重要な役割を果たした。

(3) 今後の改善点について

本取組では多くのデータが集まり、たくさんの情報、知見を得ることができた。課題としては、インドシナ難民を対象とした限定的な調査であったことが挙げられる。より多くの人数や国籍の方を対象にアンケートやヒアリングを行えば、より代表性のあるデータを得ることができたと考えられる。そのためにはより多くの団体の協力を得ることや、時間、予算をかけて調査を実施する必要があるため、今回の事業の中では実現できなかった。また、アンケートの内容も、介護制度の利用実態を踏まえた、より深い内容にすることでより具体的かつ的確に実態を捉えることができると考えられるが、介護制度の利用実態は調査を通して発覚したことでもあり、今後、今回の事業で得られた知見をもとに調査を実施していくことが望ましい。

＜取組2＞											
取組の名称		取組2: 地域で高齢期を過ごすための井戸端日本語教室　～身近な人たちと日本語で考えてみよう～									
取組の目標		外国人高齢者の交流や居場所づくり、行政サービス他の情報を日本語で的確に把握して利用するための行動を起こせるようになる。高齢期に対応できる知識、健康、体験を身に付けるための日本語の学び合いをし、併せて日本語教材の作成もする。									
取組の内容		地域には30年以上前から外国人の集住地区がある、ニューカマーと呼ばれているベトナム、ラオス、カンボジアからのインドシナ難民定住者やブラジル、ペルー、アルゼンチンからの南米の方たち、中国からの帰国者とその家族など(以下:外国人高齢者)が高齢期を迎えている。その現状は高齢であることから仕事には就けず、核家族化で子どもとの同居も叶わず、日本語の不自由さから周囲の人とのコミュニケーションがとりにくく、老夫婦で家にもってしまうケースも増えている。外国人高齢者も又、日本語支援が必須であると共に、生き甲斐を持って、地域で孤立することなく、社会生活を送ってほしいと願っている。定住者が地域社会に円滑に参加できるようにするには地域社会に適応するための高齢期を視野に入れた生活情報の周知徹底が欠かせない。しかしながら、外国人高齢者の高齢期支援体制の環境整備は図られているとは言い難い。中でも、介護保険や年金など社会保障制度が万全ではなく、又、その理解も進んでいないので、日本人とは歴然とした差があることは否めない。そこには言葉の不自由さや文化、習慣の違いのみならず、保障制度もないという負の連鎖となっている。外国人高齢者はばかりではなく、誰もが避けて通れない高齢期を豊かで実り多い時期とする為に当事者のみならず、家族支援者、行政、関係機関などが、協力して課題に向き合い、克服するための具体策を図り、外国人高齢者の高齢期への理解と支援の輪を広げて、多文化共生社会を構築しなければならないと考えた。									
☐	空白地域を含む場合、空白地域での活動										
取組による体制整備		行政機関から行政サービスについて色々なパンフレットが発行され、各国語にも翻訳されたものがあるがなかなかパンフレットから当の外国人定住者のサービスの利用にはつながらない。このような小グループで教室を運営することで特に情報弱者となっている高齢の外国人定住者に行政サービスをきめ細かく知らせ、地域で学びあえる場の提供をする事で行政はハード面の場所の確保や講師の紹介、かながわ難民定住援助協会は事業企画の立案と実施と役割分担をして、体制整備を図った。									
取組による日本語能力の向上		・様々な年代において、高齢期を迎えるにあたって必要な語彙を学び、少しでも行政のサービスをよりよく利用することにつなげられた。 ・日本語の習得と同時に、日本の社会の仕組みへの理解がすすんだ。									
参加対象者		難民定住者及び地域の外国人定住者(特に高齢期を迎えた方)					参加者数 (内 外国人数)		38人(38人)		
広報及び募集方法		チラシの配布(大和市・国際男女共同参画課/大和市、横浜市の社会福祉協議会他大和市、横浜市の団地の自治会)、市区町村のHP掲載依頼、かながわ難民定住援助協会のHP掲載、かながわ難民定住援助協会の日本語教室、横浜市泉区福祉課・難民事業本部相談窓口									
開催時間数		総時間30時間(空白地域0時間)			内訳　2時間×5回、4時間×2回、6時間×2回						
主な連携・協働先		横浜市、大和市社会福祉協議会/大和市国際化協会/大和市国際・男女共同参画課									
受講者の出身 (ルーツ)・国別内 訳(人)	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネシ ア	ペルー	フィリピン	日本	
				20							
※該当する場合のみ		カンボジア5人、ラオス13人									
実施内容											
回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	研修のテーマ	授業概要		講師・指導者名	補助者・発表者・会議出席者等名		
	平成30年10月25日 (木) 13:00～15:00	2	援助協会事務所		教材作成指導	教材内容検討・介護サービスに関して		藤田千賀子	疋田(補助者)松本(補助者)今村(補助者)尾花(補助者)		
	平成30年10月29日 (月) 13:00～15:00	2	援助協会事務所		教材作成指導	教材内容検討・病気と予防に関して		藤田千賀子	疋田(補助者)松本(補助者)今村(補助者)		
	平成30年11月1日 (木) 13:00～15:00	2	援助協会事務所		教材作成指導	教材内容検討・生活保護に関して		藤田千賀子	疋田(補助者)松本(補助者)今村(補助者)尾花(補助者)		
1	平成30年11月4日 (日) 13:00～15:00	2	いちょうコミュニティハウス	12	年をとって困ることあれこれ	井戸端の意味を知る。母国での老後について。今心配なこと。		今村明子	松本(補助者)		
2	平成30年11月11日 (日) 13:00～15:00	2	いちょうコミュニティハウス	10	介護保険のこと	介護サービスとは。その手続き・料金について		松本典子	平川(補助者)		
3	平成30年11月18日 (日) 13:00～15:00	2	いちょうコミュニティハウス	11	病気・老化の予防	老人がなりやすい病気について。健康診断・予防について。		今村明子	平川(補助者) 松本(補助者)		
4	平成30年11月25日 (日) 13:00～15:00	2	いちょうコミュニティハウス	10	生活保護のこと	生活費について話会う。生活保護の申請等の説明。経験談をきく。		櫻井弘子	平川(補助者) 今村(補助者)		
5	平成30年12月2日 (日) 13:00～17:00	2	いちょうコミュニティハウス	10	考えよう自分の老後	前回までの復習。質疑応答。老後の生活についての希望。		松本典子	平川(補助者) 今村(補助者)		
6	平成30年12月9日 (日) 13:00～15:00	4	ラオス文化センター	12	年をとって困ることあれこれ・介護保険のこと	母国での老後について。今心配な事。介護サービスとは。その手続きについて		藤田千賀子	尾花(補助者)		
7	平成30年12月16日 (日) 10:00～12:00 13:00～17:00	6	善行公民館	5	年をとって困ることあれこれ・介護保険の事・病気・老化の予防	母国での老後について。今心配な事。介護サービスとは。その手続きについて。老人がなりやすい病気、その予防について。		藤田千賀子	疋田(補助者)		
8	平成31年1月6日 (日) 13:00～17:00	4	いちょうコミュニティハウス	5	生活保護の事・考えよう自分の老後	生活保護の事。質疑応答。老後の生活についての希望。		松本典子	尾花(補助者)		
9	平成31年1月13日 (日) 10:00～12:00 13:00～17:00	6	ラオス文化センター	12	病気・老化の予防・生活保護のこと・考えよう自分の老後	老人がなりやすい病気について。健康診断・予防について。生活保護のこと。質疑応答。老後の生活についての希望。		今村明子	尾花(補助者)		

(1) 特徴的な活動風景(2～3回分)

○取組事例①

【第2回平成30年11月11日】

- ①導入：健康保険証のコピーを見せて「見た事がありますか？」「どこでつかいますか？」これは皆知っていた。
- ②介護保険証は何につかうか。
- ③介護サービスとは
 - ・在宅サービスについて サービスを受けられること・受けられないことを確認した。
 - ・施設サービスについて 特別養護老人ホーム、デイサービス、デイケアを提示した。
- ④介護サービスを受ける手続きについて
 - ・地域包括支援センターに行くこと
 - ・持っていくもの
 - ・介護認定申請書について
- ⑤施設サービスの料金について



○取組事例②

【第9回平成31年1月13日】

- ①全員で健康体操を行った
- ②老人がなりやすい病気の説明…骨折、関節疾患、脳卒中、認知症、肺炎、高血圧について症状とどこの診療科へいけばいいかを説明。生活習慣病の説明と禁煙、運動の大切さを学んだ。
- ③健康診断について、市の制度を説明
- ④老化予防…いつまでも元気であるための生活方法(運動の習慣・食事・かかりつけ医を見つける)を学んだ。
- ⑤生活保護について…現在の各々の生活費について意見を出しながら、将来的な不安について話会った。その後、生活保護のシステムについて学んだ。又、生活保護利用者に実体験を聞いて理解を深めた。



(2) 目標の達成状況・成果

井戸端日本語教室を開講するにあたり、参加者を60歳以上の高齢者と限定したので不安があったが、予想以上の参加者があり、その関心の高さに驚かされた。また出席率も良かった。多くの定住者が介護や医療のシステムについて「聞いたことはあるが、わからない・全くわからない」と不安を抱えていた。そのため、まず「老後のあれこれ」のテーマで定住者の話を聞くことから始めたところ意見が殺到して一時収集がつかないほどだった。その中から「介護保険・病気老化の予防・生活保護・老後を考える」に絞って講座を進めた。この中で大まかなセーフティーネットの仕組みは理解できた。最初はただ聞いていた定住者たちも、回を重ねるにつれて、自分から質問や話をして気持ちを伝えられるようになった。また、この講座をきっかけに、もう一度日本語の勉強をしたいという意欲を見せた定住者がいてボランティア教室で学んでいる。毎回終了後には「たくさん話を聞いてもらえてよかった」という声が聴かれた。今まで、このような教室がなかったので、教室を継続してほしいとの声が上がっていた。

(3) 今後の改善点について

今はまだ、参加者が老人向けのサービスがあるんだと、やっと理解できたという段階である。これから、このような講座は必要だと考えている。また、これから、各コミュニティを中心に予防を含め、高齢者の居場所づくりに発展させていく必要があると考えている。高齢者だけでなく、介護する側の理解も必要で、家族も巻き込んだ活動にしていく必要がある。課題は人材不足である。

＜取組3＞											
取組の名称		取組3:地域で高齢期を迎えた定住外国人の体験蓄積型日本語教室 ～身近な人たちと体験し日本語を磨こう～									
取組の目標		・主体的に地域の中へ参加することで、今後の行動の場を広げるきっかけとする。 ・日本語教室ではあるが、日本語がわからなくても参加し、アクティブに楽しめることを経験してもらう。 ・この取組を実施することで、各種サービスの在り方を考えるきっかけとする。 ・地域の中で外国人高齢者の存在を認知し、理解してもらう。									
取組の内容		「体験蓄積型日本語教室」では3回の教室を実施した。行政機関主催のイベントでは色々な催しがあるが、体験したことがある方は少ない。その中で体操教室は言葉が不自由であっても参加しやすい。ボディアクションで日本語を覚えられる。またこんな事をしていいのかと、今まで体験した事の無い事を体験することで、今後各種プログラムの参加のきっかけとなればと考えた。また今回通所介護施設（デイサービス）の見学とレクレーションに参加した。参加者は介護サービスの現場を知り、また施設のスタッフは高齢期を迎える定住外国人の存在を知り、サービスの在り方について考える良い機会となったと思う。体験しながら日本語と介護現場について日本人と学び合った。 1回目は老人ホームと包括支援センターを見学した。老人ホームでは体操やリクリエーションの見学、包括支援センターで手続きなどについて学んだ。2回目はデイサービスで体操教室に参加したり、福祉センターでいろいろな活動が出来ることを知った。3回目には包括支援センターで介護現場を体験し、福祉センターの活動を見学した。									
☐	空白地域を含む場合、空白地域での活動										
取組による体制整備		大和市・国際男女共同参画課/大和市、横浜市の社会福祉協議会他大和市、横浜市の団地の自治会 当事者のコミュニティ等にご指導を頂き また、情報を提供していただくなどの連携を深めることが出来た。									
取組による日本語能力の向上		日本語教室ではあるが、ここで習得してほしいことは言葉が不自由でも一緒にできることがあり、参加できるイベントがあることを体験した。日本語教室をきっかけに、1歩前に出ることを知ってくれたと考える。そうなると不思議なもので 日本語も上達することである。									
参加対象者		難民定住者及び地域の外国人定住者（特に高齢期を迎えた方）					参加者数 （内 外国人数）		19人（19人）		
広報及び募集方法		チラシの配布（大和市・国際男女共同参画課/大和市、横浜市の社会福祉協議会他大和市、横浜市の団地の自治会）、市区町村のHP掲載依頼、かながわ難民定住援助協会のHP掲載、当事者のコミュニティ									
開催時間数		総時間18時間（空白地域0時間）					内訳 6時間×3回				
主な連携・協働先		かながわ医療生協中田診療所デイサービス/大和市和喜園/横浜市泉区社協/大和市社会福祉協議会/大和市国際化協会									
受講者の出身 （ルーツ）・国別内 訳（人）	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネシア	ペルー	フィリピン	日本	
				12							
※該当する場合のみ											カンボジア 4人、 ラオス 3人
実施内容											
回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	研修のテーマ	授業概要	講師・指導者名	補助者・発表者・会議出席者等名			
1	平成30年12月20日 9:30～16:30	6	和喜園 包括支援センター	6	施設巡りの説明の日本語を実践的に学ぶ・老人ホーム見学	施設巡りにあたって、どんな施設かまた手続く等、座学で2時間学ぶ。その後老人ホームでの生活を聞く・話す。介護サービスで出来ることを知る。包括支援センターの役割を知り、手続きの実際を学ぶ。	栗原（座学担当・いちょうコミュニティ）	平川（日本語指導補助者）、小花（日本語指導補助者）、* 小池宏子（教材受け渡し）			
2	平成31年1月10日 9:30～16:30	6	中田デイサービス こぶし荘	7	施設巡りの説明の日本語を実践的に学ぶ・デイサービス見学	施設巡りにあたり、施設の内容、手続き等座学で2時間学ぶ。デイサービスのシステムを知る。この施設で出来ることを知り、体操教室に参加する。また老後に楽しめる施設（こぶし荘）の内容を学ぶ。	酒井（座学担当・いちょうコミュニティ）	松本（日本語指導補助者）、小池（日本語指導補助者）			
3	平成31年2月10日 9:30～16:30	6	こぶし荘・湘南包括支援センター	6	施設巡りの説明の日本語を実践的に学ぶ・老人福祉センター見学	施設巡りにあたって、どんな施設か又手続き等座学で2時間学ぶ。老人福祉センターの役割又イベントの内容を知る。この施設で出来ること・利用方法を知り、老後の生活の一助になる施設である事を知る。	今村（座学担当・いちょうコミュニティ）	疋田（日本語指導補助者）、平川（日本語指導補助者）			

(1) 特徴的な活動風景(2～3回分)

○取組事例①

【第1回平成30年12月20日】

- ①「和喜園」は特別養護老人ホームであること、特別養護老人ホームとはどんな施設が学んだ。
- ②包括支援センターとは 何をする所か学んだ。
- ③和喜園でのリクリエーション風景、居室を見学の後 屋のお食事の試食。
- ④包括支援センターで手続き等の説明。



○取組事例②

【第2回 平成31年1月10日】

- ①デイサービスのシステムについて学んで、リクリエーションに参加した。又、デイサービスでの1日のスケジュールをその用語とともに勉強した。
- ②老人福祉センターについて学んだ。その利用方法についても説明した。
- ③中田デイサービス見学し 体操教室に参加した。
- ④こぶし荘では利用方法を改めて聞き、いろいろな活動が行われている事を知った。

(2) 目標の達成状況・成果

高齢の定住者は 老人ホームやデイサービスはいやだという意識が強かった。しかし実際に見学したことで、その意識が変わってきたことが実感できた。日本語が不自由ということもあり、なかなか高齢者用の施設や福祉センターなどを利用できないが、この講座で興味を示してくれた。この講座をきっかけに行政サービスを積極的に利用しようという意欲が見られた。

(3) 今後の改善点について

これからは単に介護という事ではなく、予防(体を動かす等)の一環として学んだことを生かす場としての「日本語教室」が必要と考えた。また、高齢の定住者のサポートをする立場の日本人にたいして「やさしいにほんご」を勉強する機会をつくることも多文化共生につながると考える。

＜取組4＞											
取組の名称		取組4 シンポジウム 外国人高齢定住者と地域を結ぶ為の仕組み作りに向けて ～言葉の壁を乗り越えて～									
取組の目標		地域の外国人定住者が抱える問題を、医療・介護・法律の専門家、日本人支援者が共有し、地域の仕組み作りを考える。									
取組の内容		高齢出産、子育て、学校、就職等様々な生活場面の日本語支援が考えられてきたが、高齢定住者に向けた日本語や生涯学習等の支援、行政サービスの取り組みはまだまだなされていないに等しい。例えば後期高齢者・介護認定・認知症などちょっと考えただけでも難しい語彙が並ぶ介護サービスをどのように伝えればいいのだろうか。そもそも介護や福祉という概念は共有できるのであろうか。言葉の不自由さを抱え、情報が足りない世界で高齢期を迎えなければならない当人と家族の不安はいかばかりであろう。しかし一方日本人もまた高齢期を迎える難しさを抱えている。仏教行事に根差した難民定住者の生活を垣間見ると、精神的な豊かさを感じられ、高齢期を生きる知恵を多くもつのは彼らの方ではないかとも思われる。 このことを考えると、ここに学び合いが成立する。高齢期を過ごす仕組み作りを日本人と外国人定住者双方で考えなければならない。今回の取組1・2・3の成果を踏まえ当事者や介護事業の専門家、新聞記者、自治体関係者、研究者、一般市民、NPO法人介護を交えて、更に問題や課題を提示していただき、議論をすることで、言葉の壁を乗り越えて地域で生き生きと高齢定住者が暮らせる仕組み作りの一歩を踏み出すことができた。									
☐	空白地域を含む場合、空白地域での活動										
取組による体制整備		シンポジウムで当事者や介護事業の専門家、新聞記者、自治体関係者、研究者、一般市民、NPO法人が一同に会することで、今回の取組の成果や課題を共有し、ネットワークを強めた。また協力連携の役割分担も明確にし、標記テーマに向けた体制整備の今後について意見交換をすることができた。									
取組による日本語能力の向上											
参加対象者		高校生以上の方					参加者数 (内 外国人数)		20人(2人)		
広報及び募集方法		チラシの配布(大和市・国際男女共同参画課/大和市、横浜市の社会福祉協議会他大和市、横浜市の団地の自治会)、市区町村のHP掲載依頼、かながわ難民定住援助協会のHP掲載、当事者コミュニティとの連携									
開催時間数		総時間 22時間(空白地域0時間)				内訳 2時間×11回					
主な連携・協働先		かながわ医療生協中田診療所デサービス／在日ラオス人協会／上智大学メディア・ジャーナリズム研究所									
受講者の出身 (ルーツ)・国別内 訳(人)	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネ シア	ペルー	フィリピン	日本	
	1										
※該当する場合のみ		ラオス(1名)									
実施内容											
回数	開講日時	時間数	場所	受講者数	研修のテーマ	授業概要		講師・指導者名	補助者・発表者・会議出席者等名		
1	平成30年10月7日(日)	14:00 － 16:00	2	上智大学		シンポジウムの詳細検討			隈部和子、国枝智樹		
2	平成30年10月24日(水)	13:00 － 15:00	2	かながわ難民定住援助協会事務局		シンポジウムの詳細検討、パネリスト調整			隈部和子、櫻井弘子		
3	平成30年11月7日(水)	13:00 － 15:00	2	かながわ難民定住援助協会事務局		パネリスト調整			隈部和子、櫻井弘子		
4	平成31年1月17日(木)	14:00 － 16:00	2	かながわ難民定住援助協会事務局		パネリストとの報告内容の調整			隈部和子、櫻井弘子、国枝智樹		
5	平成31年2月11日(月)	10:00 － 12:00	2	かながわ難民定住援助協会事務局		パネリストとの最終調整			隈部和子、櫻井弘子、国枝智樹		
6	平成31年2月24日(日)	14:00 － 16:00	2	上智大学		パネリストとしての報告、議論			伊東和貴		
7		14:00 － 16:00						船越英一			
8		14:00 － 16:00						小野塚美宝			
9		14:00 － 16:00						新岡史浩			
10		14:00 － 16:00						国枝智樹			
11		14:00 － 16:00						松本典子 今村明子(作業補助)			

(1) 特徴的な活動風景(2～3回分)

○取組事例①

【平成31年1月17日】

シンポジウムにおけるパネリストとの報告内容の調整を行った。パネリストが確定した段階で、改めてシンポジウムの趣旨をパネリストらに説明し、シンポジウムの進行案や高齢のインドシナ難民定住者を主な対象として行った調査(取組1)の結果の概要を共有した。また、告知用のチラシを作成した。具体的には、5人のパネリストと1人のファシリテーターがどのような順番で、どのような方向性での発言をするのかについて確認した。まず問題提起をした上で当事業(取組1、2、3)の報告を行い、パネリストから10分ずつ関連するお話をしていただき、最後に質疑応答の時間を設けるという流れを決めた。難民問題を扱ってきた記者、難民支援を行ってきた自治体職員、介護サービス提供者、外国人当事者にそれぞれ異なる視点からお話をしていたことで、多角的な議論を展開する計画を立てた。

○取組事例②

【平成31年2月24日】

上智大学2号館で公開シンポジウムを実施した。登壇者は13時に会場に集合し、14時から16時までシンポジウムを行った。まずかながわ難民定住援助協会会長が開会の挨拶を行い、ファシリテーターが趣旨説明と登壇者の紹介を行った。その後、二人の登壇者が本事業の取組1、2、3について説明し、パネリスト4名にそれぞれの立場からお話をしていただき、全体での質疑応答を行った。質疑応答の時間は会場から登壇者に対してさまざまな角度から質問が行われ、活発な議論が展開された。最後に、登壇者と来場者で簡単な懇親会を行い、シンポジウムの内容や今後の高齢者問題について継続的な議論が必要であることを確認し、親睦を深めた。



(2) 目標の達成状況・成果

シンポジウムは予定通り2月24日の14時から2時間、実施することができた。事業の取組1、2、3それぞれについて報告をするともに、登壇者や来場者の方々とは情報や意見を交換することができた。事業の成果を公表するとともに、フィードバックを得ることができたことで、事業の意義を再確認するとともに、新聞記者や介護サービスの提供者、自治体職員、そして外国人当事者それぞれの認識がどの程度共有されているか否かを確認することができた。外国人定住者問題を扱う研究者からも専門的な指摘を得ることができ、多角的な視点から事業を振り返るとともに、今後、外国人高齢者向け支援における課題やそれぞれの役割、今後の連携について確認することができた。

(3) 今後の改善点について

今後の改善点としては、まず、事業の報告を短時間で行ったため、詳細を報告することができなかった点が挙げられる。ウェブサイト上での公開など、他の公開方法も含めて情報の公開をする必要性が感じられた。進行については、登壇者がそれぞれ発言することや、参加者からの質問を受け付けることができた点で特に改善点はない。

4. 事業に対する評価について

(1) 事業の目的・目標

地域で高齢期を迎えている外国人定住者の安心・安全な老後を過ごせる地域社会づくりを共に考え、行動する。

(2) 目的・目標の達成状況・事業の成果

取組1 郵送を含めて80人にアンケートを渡し、45人からアンケートの回答を得ることができた。また、20人近い方からヒアリングを行うことができた。アンケートとヒアリングの結果は整理し、取組2から4の企画と実施に役立てることができた。外国人高齢者が集まる場は少なく、アンケートを郵送しても回答を得ることが難しいことが予想された中、各コミュニティのリーダーのサポートを得て人を集め、会場も借りてアンケートやヒアリングを実施できたことにより、多くの方から貴重な情報を得ることができ、インドシナ難民定住者の高齢者を中心とした生活の実態や悩み、老後に対する考え方などを相当程度把握することができた。また、取組2、3を実施するにあたっての開催場所や実施内容、進め方についても貴重な意見を多数得ることができ、その後の事業を進める上で重要な役割を果たした。

取組2 井戸端日本語教室を開講するにあたり、参加者を60歳以上の高齢者と限定したので不安があったが、予想以上の参加者があり、その関心の高さに驚かされた。また出席率も良かった。多くの定住者が介護や医療のシステムについて「聞いたことはあるが、わからない・全くわからない」と不安を抱えていた。そのため、まず「老後のあれこれ」のテーマで定住者の話を聞くことから始めたところ意見が殺到して一時収集がつかないほどだった。その中から「介護保険・病気老化の予防・生活保護・老後を考える」に絞って講座を進めた。この中で 大まかなセーフティネットの仕組みは理解できた。最初はただ聞いていた定住者たちも、回を重ねるにつれて、自分から質問や話をして気持ちを伝えられるようになった。また、この講座をきっかけに、もう一度日本語の勉強をしたいという意欲を見せた定住者がいてボランティア教室で学んでいる。毎回終了後には「たくさん話を聞いてもらえてよかった」という声が聴かれた。今まで、このような教室がなかったので、教室を継続してほしいとの声が上がっていた。

取組3 高齢の定住者は 老人ホームやデイサービスはいやだという意識が強かった。しかし実際に見学したことで、その意識が変わってきたことが実感できた。日本語が不自由ということもあり、なかなか高齢者用の施設や福祉センターなどを利用できないが、この講座で興味を示してくれた。この講座をきっかけに行政サービスを積極的に利用しようという意欲が見られた。

取組4 シンポジウムは予定通り2月24日の14時から2時間、実施することができた。事業の取組1、2、3それぞれについて報告をするともに、登壇者や来場者の方々と情報や意見を交換することができた。事業の成果を公表するとともに、フィードバックを得ることができたことで、事業の意義を再確認するとともに、新聞記者や介護サービスの提供者、自治体職員、そして外国人当事者それぞれの認識がどの程度共有されているか否かを確認することができた。外国人定住者問題を扱う研究者からも専門的な指摘を得ることができ、多角的な視点から事業を振り返るとともに、今後、外国人高齢者向け支援における課題やそれぞれの役割、今後の連携について確認することができた。

どの事業も対象者である、高齢外国人の方々が積極的に講座や事業に取組み、自身の高齢期の過ごし方に強い関心をもって向き合っていることが分かったのは大きな成果であった。

(3) 地域の関係者との連携による効果、成果 等

地域大和市や生涯学習センターとは事業への参加と希望事業の共催を提案、指導者の紹介と場所の提供の協力要請、横浜市泉区、通所介護施設とは見学と施設の紹介の協力要請、専門家(大学)とアンケートの編集とシンポジウムのまとめ、大和市国際化協会とは本事業の協力者や外国人への参加促進の周知などの協力体制を図り、事業を実施する。企業、NPO法人、自治会、ボランティア団体などには各事業への参加や周知を依頼して、連携協力体制を敷き、地域の日本語教育の必要性を広く地域住民の方々に呼び掛けることが出来た。

(4) 事業実施に当たっての周知・広報と、事業成果の地域への発信等について

取組1 インドシナ難民コミュニティやかながわ難民定住援助協会の日本語教室などを通してアンケートやヒアリングの回答者を募り、配布
取組2 チラシの配布(大和市・国際男女共同参画課/大和市、横浜市の社会福祉協議会他大和市、横浜市の団地の自治会)、市区町村のHP掲載依頼、かながわ難民定住援助協会のHP掲載、民族コミュニティとの連携
取組3 チラシの配布(大和市・国際男女共同参画課/大和市、横浜市の社会福祉協議会他大和市、横浜市の団地の自治会)、市区町村のHP掲載依頼、かながわ難民定住援助協会のHP掲載、当事者のコミュニティ
取組4 チラシの配布(大和市・国際男女共同参画課/大和市、横浜市の社会福祉協議会他大和市、横浜市の団地の自治会)、市区町村のHP掲載依頼、かながわ難民定住援助協会のHP掲載、当事者コミュニティとの連携

(5) 改善点、今後の課題について

取組1 アンケートおよびヒアリング調査では多くのデータが集まり、たくさんの情報、知見を得ることができた。課題としては、インドシナ難民を対象とした限定的な調査であったことが挙げられる。より多くの人数や国籍の方を対象にアンケートやヒアリングを行えば、より代表性のあるデータを得ることができたと考えられる。そのためにはより多くの団体の協力を得ることや、時間、予算をかけて調査を実施する必要があるため、今回の事業の中では実現できなかった。また、アンケートの内容も、介護制度の利用実態を踏まえた、より深い内容にすることでより具体的かつ的確に実態を捉えることができると考えられるが、介護制度の利用実態は調査を通して発覚したことであり、今後、今回の事業で得られた知見をもとに調査を実施していくことが望ましい。

取組2 今はまだ、参加者が老人向けのサービスがあるんだと、やっと理解できたという段階である。これからも、このような講座は必要だと考えている。また、これから、各コミュニティを中心に予防を含め、高齢者の居場所づくりに発展させていく必要があると考えている。高齢者だけではなく、介護する側の理解も必要で、家族も巻き込んだ活動にしていける必要がある。課題は人材不足である。

取組3 これからは単に介護という事ではなく、予防(体を動かす等)の一環として学んだことを生かす場としての「日本語教室」が必要と考えた。また、高齢の定住者のサポートをする立場の日本人にたいして「やさしいにほんご」を勉強する機会をつくることも多文化共生につながると思う。

取組4 まず、事業の報告を短時間で行ったため、詳細を報告することができなかった点が挙げられる。ウェブサイト上での公開など、他の公開方法も含めて情報の公開をする必要性が感じられた。進行については、登壇者がそれぞれ発言することや、参加者からの質問を受け付けることができた点で特に改善点はない。

しかしながら、予測しがたい、老後の資金や健康面などで不安を残し、子ども家族との関係性についても問題がないわけではないように見受けられたことが今後の課題となると考える。

(6) その他参考資料

- ・(取組1)アンケート報告書
- ・(取組4)シンポジウムチラシ